

XII

しんがら
やい



そもそも天之カムトと天易ノアが4人のこどもを授かつて離婚し、天平クラトと彝之カミノが4人のこどもを授かつて死別し、それぞれこどもを連れて天之カムトと彝之カミノアが結婚し、3年後に双子の女の子、5年後に男の子を授かり、縁あって孤児であった朱羅子を引き取り、12人兄弟姉妹及び両親の総計14人家族となったのである。

外食に行くものなら大々騒動だ。

車は改造して公認を取った5列シート15人乗りのワゴンを使う。カムトはそのため大型免許を取得した。ワゴンの隣にはアルファロメオとハーレーがある。

リ्यूジュ(龍咒)は早起きしてそそくさと朝食のトーストを齧り、出発予告の30分前からもう坐っている。一番奥が彼のお気に入りで、奪われないように誰よりも早く乗るのだ。じつと本を読むか雨を見ていた。ガレージは家と繋がっていて屋根も壁もあってフロアリングも施されていてまったく快適だが、丸テーブルの向こうにある大きな出窓から庭を激しく撃つ弾雨が見えるのだ。本は最近父の書斎から借りている『まんが哲学の歴史』だった。その最後の章は「複雑系について」だ。それは、古代の哲学の多くが持つ一つの傾向、すなわち流動的揺れる不安定な複雑さで、規則性の希薄な、曖昧糲糊としてこった煮的に雑多な実際の事象を、整理して、大きな太い一つの原理で説明しようとする基本的な傾向があることに敢えて逆らって、複雑なものを複雑なままに理解しようとする思考のスタイルだった。統一的な原理に深い快感を覚える感性の彼にとっては軽い衝撃だった。

7歳のかほ(果歩)が来た。

「おにいちちゃん、さむくないの?」

「うん」

「おにいちちゃん、くらくないの?」

「うん」

「おにいちちゃん、クッション敷かなくていいの?」

「うーん」

彼女は思慮深い二つ年上の兄を崇拝していて、その面倒を見るのを自らの矜持としていた。彼がかほたちには到底理解の及ばない甚深な全宇宙森羅万象の真理原理に通暁していると信じて已まないのだ。

「おまえらいつも早いな」

父カムトがぼさぼさの髪をかきながら寝惚け眼で欠伸しながらやって来た。体の大きな

男でタンクトップに大きなポケットの付いた作業用ズボン、しかし仕事はイラストレーターである。

「さあつてと、支度するか」

そう言ってボンネットを開けると、ファン・ベルトの張り具合のチェック、エンジン・オイルの確認から、エア・フィルターの吸塵、プラグを外してスラッジを金ブラシで掃除し、ギャップ調整をする。次は増し締めだ。トルク・レンチを使ってナットでボルトを締める。

「上々だ」

たつやは支度を終えてご飯をかき込み、もうダイニングを出て行くところだった。中学に入学と同時に野球部に入って二か月弱、部活に勉強に張り切っていたので、毎日とても早起きなのだ。

まな（真那）は背が高く、痩せているが、骨格はしっかりしていて、手も足も（女性の割には）大きい。長い髪も艶美しいが無造作で、カールしているのは天然だ。

「さ、早くしなさい、さやか（沙耶伽）、ゆま（憂真）。イルやエノの方が早いじゃない。

ゆま、どうしたのよ、何怒ってんの？」

「別に。これ、わたしの匙じゃないわ」

「いいじゃない、全然大丈夫よ。文句あるなら自分で出しなさい。もう小5でしょ？ さやか、あんたもだよ、笑ってんじゃないの」

「ねえさん、そんながさつだから19にもなってカレシできないんだよ」

「そうね。そこだけあんたに負けるけど口惜しくないわ。それよか、あんた来年は高校受験なのよ、それも少しくらい考えたら？ カレシの数じゃ残念ながら一芸に秀でたとは言われないよ」

はたと（隼斗）が笑う。

「ひやはは、うまい！ さすが進学校卒、進学してねーけど（笑）俺の高校に来るか、さやか？」

「絶対やだ。いまだきアフロ・ヘアの奴の妹だって思われたくないの。あたしは可愛いから大丈夫、勉強なんてかんけーねー」

「おまえが来る頃は卒業してるよ、ちょーバカじゃね？ おバカタレントにでもなるのか？」

「えっ、退学じゃなくて？」

まなが溜息する。

「ただのバカでタレントになれると思ってるの？ あんたら舐めてるよ、世の中って、見掛けのとおりじゃないのよ」

「ひゅーひゅー」

「うつるさい、からかうな、はやと！」

「まな姉ちゃん、早くいこーよ」

双子のイルとエノが声をそろえる。3歳でかわいい黄色いとピンクの服。

「まな姉ちゃんは忙しいから、あやか（紋夏）姉ちゃんで行こうか？」

既に食事を終えて食器を洗っていた12歳のあやかが言う。柔らかな栗色の髪に大きな瞳ふつくらした白い頬、優しげに首を傾げて幼子を愛しむ。しかし、

「いっやだーっ」

「あらあら、いつも嫌われちゃうね」

そう言って笑う。幼い子のわがママが可愛くて仕方ないらしい。そこへ朱羅子の手を引きながら一歳のまを（摩魚）を抱っこした母カミノがあらわれる。小柄なのに快活で大きく見える小麦色のマンマだ。

「アレー、まだ終わってなかったの！ もう行くよお」

「え？ かあさんたちはもう食べたの？」

「たつやとリュージュが早いからね。かほ（果歩）が起こしに来たのよ」

「かほはリュージュ・フェチだからねー。朱羅子もかあさんフェチだけど」

「じゃあ、まなちゃん、私は行くね。皆を連れて来てね」

「えー、そうなの？ 自信ないけど頑張るよ。じゃ、イルとエノはかあさんといっしょに行きなさいね」

「えー、やだー、まな姉ちゃんといくー」

「いいから行きなさいっ！」

「はあーい」

たつやはナヴィ・シートに坐るのが常だった。タブレットPCを設置し、ナヴィをセッ

ディングするのが誇らしいし、楽しいし、バトル・シップの操縦者になったような高揚感を覚えるのであった。父の手伝いがうれしらしい。

そこへ母とまをと朱羅子とイルとエノの『小っちゃい組』がやって来る。

「さあ、じゃあ、かあさんたちは、前の席に坐るわよ」

奥へ入るのは大変だからだ。

「いいぞ。もうチャイルド・シートはセット済みだ」

周知のとおり6歳以下の子はチャイルド・シートを設置してそこに坐らせなければならない。1歳1名・3歳2名・4歳1名で構成される『小っちゃい組』は全員『特別席』の該当者という訳だ。5人はコックピットの後ろ2、3列目を占拠する。まをと朱羅子がカミノとともに2列目に坐り、あとの2人は3列目へ。

まをが来てその後ろの列に坐る。すぐ後に来たあやかが、

「あ、またー。ゆまちゃん、奥につめてよ。あとから来た人が入りにくいよ」

「ふ。遅く来たのが悪いんじゃないの？ 何で早く来て損しなきゃなんないの？」

「リ्यूジュとまほを見なよ」

「意味わかんない、何で先に来て奥坐ってんのよ。莫迦じゃない？」

「そう。わかったわ。もういいよ。そんな言い方、リ्यूジュたちがかわいそうよ。いっしょに坐ろうね、かほちゃん」

そう言って5列目に入る。

リ्यूジュは人に譲って奥に坐るわけではないので黙って下を向き、本を読んでいた。まほもそれを察していて黙っている。

さやかがのたのたとやって来る。「ふう。めんどくさい」

まなが来て「さやか、来たでしょ？ ああ、いるわね。でも、はやとがまだなのよ。もう待ち切れなくてきちゃったわ。ふうっ」と溜息して3列目に坐る。イル・エノの2チャイルド・シートとならぶ。

カムトがハンドルに手をかけて身を乗り出し、怒鳴った。

「おおーいつ、はやと、早く来いつ、早くしろいつ！」
しばらくして、

「ういー」

シャツのボタンを嵌めながらパンを啜えながらベルト引っ張りつつあらわれる。

「何か髪型きまなくてさー」

「おまえまたか、ドライヤーちゃんと消して来ただろうな」

「あ、やばいかも、ちよつと待って、見てくつから」

ワゴンはエンジン音の唸りを上げて自動開閉するガレージのシャッターをくぐり、土砂降りの中を勇ましく出動する。

そしてようやくレストラン。

席はいつも席を4つ繋げて14人分を確保している。本来なら16人分なので余裕はある。はやとが大喰らいで皿がならぶので、ちよつどいい。

北側が濃い赤でプリーツの入ったベンチシートで、南方が肘かけ付きの木製の椅子だ。『小っちゃい組』が南にお子様用椅子をもって坐り、その左右どちらかにカムトかカミノがまなが添う。母はいつも2人分面倒を看ている。北ベンチ・サイド中央にははやとが坐り、中央から西に向かって、あやか・さやか・たつや。東に向かって、ゆま・かほ・リュージュ。こんな感じ、

朱羅子 カミノ まを イル カムト エノ まな

リュージュ かほ ゆま はやと あやか さやか たつや

リュージュはいつも端っこが好きだった。調味料やメニューの立つそのあたりに隠れるように坐っているのが大好きだった。うらさびれた感傷の翳りにどっぷり浸るのに最適だった。隠れて空想を廻らせる。ここは王都だ。砦のように装飾性がなく、過酷な容姿をした城砦。ゴシックの尖塔のようにいくつもの塔が切っ尖で天を射す。誕生日に買ってもらったiPad miniWi-Fiモデル16GBが王様で他の者たちは騎士だ。未知の国を仲間と冒険する旅。

端っここの窓側。これこそ彼の望みなのである。

雨は激しく街路樹やアスファルトや花壇を撃っている。マシンガンだ。不規則なドラミング。閉じた窓から湿った冷風が微かに忍び込んでいる。

彼は朱羅子の視線に気が附いた。じつと見ている。不思議な子だ。何か霊的なものを感じさせる。あの眼でじつと見られると何もかも見透かされているような気がする。実際、彼女はすべてを知っている、ような気がするし、現に何度か驚かされたことがある。しか

しそれを口にしないから余計に神秘的なのだ。

例えばみんなで探し物を、財布がないとか、テレビのリモコンが見当たらないとか、印鑑がないとかいうときに、

「箆笥の上、茶色い箱の下に」とか、「キッチンの中斗だよ」とか、「洗濯機の下に落ちてる」とか言っただけで済む場所を見ると、必ずそこにあるのだ。それだけじゃなくて、

「あ、〇〇さんが来る」「畝村村のおじさんが来るよ」とか言っただけで、「いや、連絡しなくてごめんよ、急にこっちに来る用事ができてね」などと言いながらひょっこりその人があらわれるのである。一度怖いときがあった。「あ、〇〇くんが……」と言っただけで済んだ後、黙り込んでしまっただけで何を尋ねてもその日は口を利かなかったが、翌日、かほの同級生の子で、家に一度だけ遊びに来た〇〇くんという子が交通事故に遭い、集中治療室に入っていたことが分かった。その事故がちょうど朱羅子が声を上げた時刻だったのだ。

ひねくれた言い方をすれば、よく聞く類の話と言えなくもないが、実際傍にそういう人がいると少し気味が悪いものだ。兄弟姉妹らは朱羅子に少し恐ろしさを感じていた。それは異質感にも繋がっている。

朱羅子は或る日突然両親が連れて来て家族になった子だ。それを知るのはリュージュ以上の年齢の者で、かほなどははっきり覚えていない。赤っぽい髪は短めで、耳を蔽うくらい、硬くバラバラな感じで広がっているせいか、長めのおかっぱに見えなくもない。眼が大きく猫に似ている。まつ毛は長く濃いのが、可愛いという風ではない。鼻梁は低めだが鼻先が高く、雀斑がある。眉は弓のように山型に持ち上がっていた。髪が赤っぽいせいか双眸が緑鬱に見えるときがある。

「しゅら、どうしたの？」

リュージュが尋ねた。

「うん、何でもない」

「そっか、何か見えた？」

「うん」

「そっか、よかった」

朱羅子の顔が昏くなった。リュージュは悪いことを言ったなと思った。いつもよくない兆しを言うみたいじゃないか……見えなくてよかった何て言っちゃうと。

「そういう意味じゃないんだ」

「何のこと」

気にしない風をしてるんだなあ……と思った。

「ねえ、おにいちちゃん」

かほが声をかけてくる。

「おにいちちゃんのたのんだ、スープスパゲティっておいしいの？」

「ああ」

かほがまた気を遣ってるなと思いつながら、リ्यूジュは応える、

「家ではあまり出てこないから、特に美味しいと思うんだよ」

「そう、このつぎきたら、わたしもたべよう。きょう、ちよつとくれる？」

「うん。いいよ」

リ्यूジュはiPadでyoutubeを見始めた。最近、気になる動画がある。日本人がアップした動画だが、顔の左半分が和彫りの青龍の刺青で覆われた若い男がボーカルをするロック・バンドで、狭いスタジオで演奏しているというものだった。異様なその凄まじさに激しく痺れるような高揚感を覚える。『v v w (クワドループル・ヴイ)』というバンドだった。

「イタルだね」

かほの隣に坐っているゆまが覗き込んでそう言った。

「イタル？」

「犂之イタルだよ。眞神の有名人だよ。死んじゃったけど、十七歳で」

カミノが厳しい声で言う、

「ゆま、そんな話はやめなさい」

「はあい」

不満げにゆまが黙った。

リ्यूジュは何かただならぬ気配を母の表情に感じる。それは朱羅子も同じようだった。彼女は心なしか蒼腿めているような気がした。

その夜、リ्यूジュは部屋から隣の部屋のゆまにメールした。ちなみにたつやとかほが同室だ。

「イタルのことが知りたい」

返信が来た。

<http://book.geocities.jp/siveyesh/index.html> を見なよ。イタルは朱羅子の本当の父親だよ。17歳で死のパフォーマンスをしたんだ。母親はそのとき14歳だった“まあや”って子。生きてれば19歳だね」

「しゅらは知ってるのかな」

「誰も教えてないはずだけど、あのことから、知ってる気がする」

「ゆまねえちゃんはなんで知ってるの？」

「つか、あんたなんで知らないの？」

リ्यूジュは調べた。

情報は意外に多くあった。まず動画はたっぷりアップされていた。v v wは短い活動期間しか持たなかったが、イタルの余りの狂行でほとんど活動できなかったため、ほとんどドラマーであった天平普肅の自宅にあるスタジオで曲作りに熱中し、それ録音・録画した。そしてそれが彼らや彼らの仲間たちの手によって次々アップされた。動画は主に youtubeだ。それを片っ端から観る。さらにインターネット上を手当たり次第に探しまくる。そのうち、リ्यूジュは或るブログの中に次のような記述を見つけた。

“解散したv v wはインディーズですらなかった。彼らを観たり聴いたりしたと言う人はその曲やパフォーマンスを投稿形式の動画サイトで観聴きしたに過ぎない。ステージを観たと言える人は70億人の中で数十人しかない。

ステージと言っても、ただ一度しかない。しかもライブ・ハウスへの出場権をかけたコンペティションで、いわば公開されたステージング・テストであった。十七歳のイタルはそのステージで数千万円相当の機材を故意に破壊した。すなわちギターを叩きつけて壊す。それが最初のパフォーマンスだった。最後のステージングでもある。そのせいでライブ・ハウスはしばらく使いものにならず、店の営業者はもちろん、バンド仲間などからも激しい非難を受け、莫大な損害賠償請求によって家族に負担をかけた。その次には、顔の左半分に青龍の刺青を和彫で彫った上に、公園でゲリラ・ライブを強行、しかもガソリンを撒いて火を放ち、警察沙汰になる。最後は誰にも知らせず、眞神の御山の頂上にある古代の祭祀跡のある聖地、石塔型の磐代の上に登り、ガソリンをかぶって体に火を点け、炎の塊となってそこから飛び降りるというパフォーマンスを演じた。十七歳だった。

なおこの最後のパフォーマンスには一つのエピソードがある。イタルに想いを寄せてい

た十四歳のまあやは愛の直感でイタルが眞神山に来るのを予見し、死のパフォーマンスの直前、眞神の麓で待ち伏せして、イタルの行為を止めようとするが、イタルは聞かず、「どうしても行くならわたしを殺してください」と懇願するまあやを冷徹な眼差しで睥睨する。そして遂に……。イタルは気を喪ったまあやを置いて、頂上の磐代に向かった。まあやはイタルの子を宿した。「これしかあの人を生かす方法がなかったの」 彼女はそう述懐したという。

常軌を逸した行為、人の世の愛すらも否定するかのような逸脱した行動。だがそのインパクトには理性では解明できない実存の Presence があつた”

朱羅子は知^ちつて^いるに^い違^いない。リージュは確信した。

落雷のような衝撃だった。恐るべき深淵を眼の前にしたような心境だ。人の知り得ないこの世の深淵。でも彼女は黙っている。語っても誰にも理解されないだろうからだ。誰にも意味はわからない、そうに違いない。それがどれほど孤独であるかを想像し、リージュは戦慄を覚えた。

或る日、久し振りに居間に全員がそろつた。思い思いの場所を占拠し、大型テレビに映る家族旅行のビデオを見ている。今は三人掛けのものが3つ、コの字型に置かれている。そしてその後ろに一人掛けが5つ、規則性なくバラバラに置かれている。

龍児は窓に近い一番背後の一人掛けのソファに坐つて映像を観るというより全体を眺めている。

小柄で快活な小麦色のマンマ、カミノは真ん中のソファで、巻き毛の双子イルとエノ、眼を丸くして小さな唇を中開きにしてビデオに見入っている。そこにはカミノに縋るように朱羅子も坐っている。相変わらず朱羅子は赤っぽい硬くてバラバラな長めのおかっぱ、猫眼でまつ毛は長く濃く、緑鬱の双眸、雀斑に囲まれた鼻。

摩魚は右の三人掛けでぼさぼさの髪をかく父カムトの膝の上。眼はじっと画面を見ているが、本当に見ているのかどうかよくわからない眼差しだ、短い薄い茶色い髪で指をくわえて。

左の三人掛けには、ソファの上で胡坐をかく隼斗、リモコンを握ったままの三分刈り頭のたつや、そして紋夏、ときどきイルの巻き毛に指を絡ませて真剣に観ている幼子をからかっている。大きな瞳で幼子を愛しむ。ふっくらした白い頬と柔らかい栗色の髪のハルモニアが慈愛の象徴のようでもある。

果歩はリージュの傍の一人掛けにきちんと坐って真剣に映像を観ていた。真那は脚を組み、遠い眼で見ている。何かを思い出しているようだった。背が高く骨格がしっかりしているのかっこいい。艶美しいカールした野性的な髪がどこなく豪奢でもある。憂眞はソファの上で片膝立てて怠そうにタブレットPCを弄ってネット見ている。沙耶伽もまた先程からずっとスマートフォンでメールしている。

リージュは家族ら、そして漠然と在るすべてをしみじみと眺めながら思う、これが答えなのかもしれない、と。

終

生年 2015 現在		性	齢	
1970	天之カムト	男	45	
1971	天易ノア	女	44	
1972	天平クラト	男	43	
1974	森之カミノ	女	41	
1996	真那	女	19	カムト・ノア
1998	隼斗	男	17	クラト・カミノ
2001	沙耶伽	女	14	クラト・カミノ
2002	たつや	男	13	カムト・ノア
2003	紋夏	女	12	クラト・カミノ
2004	憂眞	女	11	カムト・ノア
2006	龍咒	男	9	カムト・ノア
2008	かほ	女	7	クラト・カミノ
2012	イル	女	3	カムト・カミノ
2012	エノ	女	3	カムト・カミノ
2014	摩魚	男	1	カムト・カミノ
2011	朱羅子	女	4	